

7 カナリヤ

そのカナリヤが清きよしの家にまよいこんできたのは、三月の終わりの土曜の午後であった。

山田君たちが遊びにきそいにくるのを待ちながら、暖あたたかいえんがわで本を読んでいると、あけはなしたまどから何か黄色いものがへやの中にとびこんできた。初めは木の葉かと思ったが、テールの上うへにちよこんととまったのを見ると、なんとそれは、カナリヤであった。清が近づいて手をのばすと、にげもしないでじっとしている。そつと手のひらひらに包つつみこんでも、やはりじつと



している。ぐあいでも悪いのかと思つてよく見ると、目はくりくりとしていて、くちばしだつて元気そうに動かすのである。ためしに窓まどをしめて部屋の中にはなしてやると、電灯でんとうのかきにとまったが、そこからまた清の肩かたにもどつてきた。ちつともこわがるようすがないのである。そのうち、ガラスに写うつる自分のかげをくちばしでつついてみたり、首をかしげてみたりしはじめたが、そのしぐさがとてもかわいい。

よほどよくかいならされたカナリヤなのであるう。清はすっかりそのカナリヤが気に入ってしまった。そして、天のめぐみではないかと思った。

一か月ほど前、清のいとこの洋子よしこが、じゅうしまつがふえすぎたので、ひとつがいあげると言ってきた。去年のくれに洋子のところへ遊びに行ったときに、す立ったばかりのじゅうしまつを見せてもらい、あまりかわいいので、自分でもかってみたいようなことを言ったのを、思い出してくれたのかもしれない。清はたいそう喜んで、鳥かごを買って待っていた。ところがきのうになつて、友だちに分けたら数がへってしまったから、今度生まれたときあげると、電話でことわってきたというのである。清はがっかりした。そこへ、このカナリヤである。

鳥かごにもなれたカナリヤは、ピーピーとすんだ美しい声で鳴いた。「ピー」という名前をつけることにした。

「まあ、かわいいカナリヤ。でも、こんなに人なつっこいんだから、かい主はきつと悲しんでいるでしょう。もし、どなたがかつていたカナリヤなのか、わかったときは返してあげましょうねえ。」

と、母が言った。清は、それには返事をしなかったが、心の中では、かい主が見つからなければよいのと思った。

それから一週間ばかりして、清は、いつもの道を学校から帰ってくる途中とちゅうで、ポストの立っている四つ角に面したうちの白いへ

いの中で、話し声がするのに気がついた。それを清は聞くともなく聞いてしまったのである。

「そうなんです。生まれて三十日目からえづけをして、それはかわいがって育てていたんですよ。英子えいこばかりでなく、家中がむちゆうになって、元気がないときなどは、夜もねないで心配したものです。ですから、今ではすっかりなついて、かごから出してもにげる心配はなかったのです。それがこの間の、ほら、うらのきつえい所のすごいばく発はくはつきわぎでしょう。そのときたまたま外に出していたので、おどろいたのでしょうね。あつという間に飛とんでいってしまったのです。小鳥の好きな人にもうまく見つかって、かわいがってもらっているのであれば、

ば、それでもまだあきらめがつくんですよ。もし、ねこにでもとられたのであつたらかわいそうだと思ひましてねえ。」

清は、いやなことを聞いてしまったという思いで、急いでその場所をはなれた。家に帰ると、カナリヤは清に気がついたらしく、ピーピーと鳴き声をたてた。そつと首すじをなでてやると、あまえるようにおとなしくしている。

「おい、おまえはほんとうにあそこのうちのカナリヤかい。前のうちに帰りたいかい。それとも、ここにいて、ぼくにうんとかわいがってもらった方がいいかい。」

そう言うと、カナリヤはまたピーと鳴いた。清にはそれが、ここにいたいと言っているように聞こえた。清はうれしくなつて、帰

りに聞いた話を、自分につごうのよいように考え始めた。なにも今すぐ返しにいかなくてもいいだろうぐらいに思つて、父や母にもそのことは話さないでいるうちに、いつの間にかそれを忘れてしまった。

次の日曜日。その日は、父も母も外出していた。そこへ、山田君たちがソフトボールの練習に行こうときそいにきた。

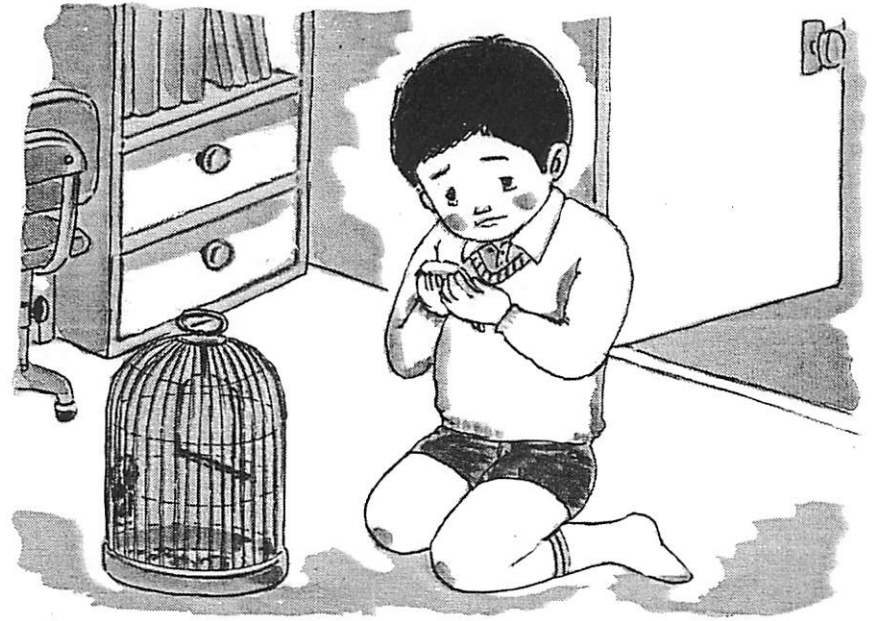
「暖かいから、ピー、ひなたぼっこをしておいで。夕方までには帰ってくるからな。」

清は「ピー」にそう話しかけると、庭の木に鳥かごをかけて遊びに出かけた。

三時ごろから天気が急変し、春のあらしがおそつてきた。寒い風が砂ぼこりをまき上げた。それでも、ソフトボールにむちゅうになつていた清が家に帰りついたのは、風がふき始めてから一時間以上もたつてからだつた。美しく咲いていた桜の花が、庭一面に散つていた。

カナリヤは鳥かごの中で羽をふくらませ、ひつしに寒さからのがれるようにうずくまっていた。清は青くなつて鳥かごを家に入れた。「ピー」をだきしめた。

それでも不安で、両手でそつとかかえ上げ、胸を広げてふところの中へ入れてみた。綿や布で包んでもみた。息をハアハアかけてもみた。しかし、「ピー」は元気を回復するどころかますます弱まるばかりで、そのうちにとうとう横になつてぐったりしてし



まった。

「ピー、ピー。」

清は、今にも泣きださんばかりの声をはりあげて、けんめいに「ピー」をあたためた。しかし「ピー」のからだはだんだん冷たくなり、父と母が家に帰ったころには、羽を広げたまま、だらりとして目もとじてしまっていた。

父にしかられても、母になぐさめられても、清の涙は後から後か

らあふれた。冷たくなった「ピー」を、清はいつまでもだきかかえていた。

清は、うしろめたい気持ちでいっぱいであった。こんなことになるんだったら、なぜあのとき、すぐ返しに行かなかったのだらう。かわいいからといって、かい方も知らないで自分のものにして、かわいからといって、「ピー」を殺してしまった。白いへいの家の人、鳥の好きな人に見つかったのならあきらめられると言っていたのをさいわいに、返さないで置いて、「ピー」を死なせてしまったと思うと、死んだ「ピー」にも、あれまでに育てた家の人にもすまなくて、いつまでも胸がいたんだ。

7 カナリヤ

3-1) 自然のすばらしさや不思議さを知り、自然や動植物を大切に。
(自然愛・動植物愛護)

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

人間をとりまく環境は日々変化している。特に過去数十年間の産業発展、地域開発等によってもたらされた自然破壊は甚だしい。しかし、それによって自然に対する正しい認識をもつことができるようになってきた。

現在では、動植物に対する保護運動が盛んであるが、それには、動植物に対してやさしいたわりの気持ちが必要である。しかも、生き物の世話をするには、そのための正しい知識ももっていないといけない。ただ単にかわいいからとか、飼ってみたいからという興味だけでは逆に動植物を死なせてしまうことになることを理解させたい。

〈子どもの実態について〉

子どもの大半は、動植物に対してきわめて親近感が強く、小鳥、金魚などの小動物を飼育したり、草花を栽培することにたいへんな関心をしめし、経験も積んできている。

ところが、自分本位のかわいがり方になり、

興味のある時にはかわいがりが、気がむかなくなると世話をしなくなったり、いじめたり、また時として生命を絶つことさえある。生命の神秘さ、不思議さに目を向けるまでにはいたっていないのである。

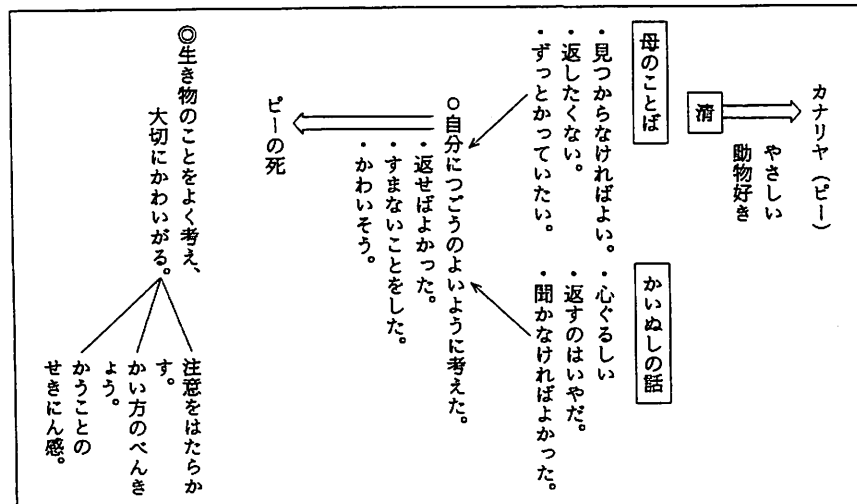
〈資料について〉

滑がまよいこんできたカナリヤを自分の不注意で死に至らしめた場面を深く追求し、真の動物愛護とはどういうものか考えさせたい。

特に、自分の所有物でもないのに勝手に理由づけをし、自分の興味本位で飼いはじめた場面や、本当の飼い主がわかったにもかかわらず返さなかった場面を考えさせることによって、それらが、死に至らしめる原因になっていることに気付かせたい。また、カナリヤのことを忘れてソフトボールの練習をしていた滑の無責任さを批判的にとらえさせることによって、動物への真の愛情をつかませたい。

2) ねらい

やさしい心で生き物をかわいがり、大切にしようとする心育を育てる。



3) 展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 今までにどんな動物を世話してきたのかを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今までにどんな動物の世話をしてきましたか。また、試してみてもう思いましたか。 <p>(2) 資料を読んで、滑の行動や気持ちについて話し合う。</p> <p>① 母の言葉に対して滑はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼い主が見つからなければよい。 ・返したくない。ずっと飼っていたい。 <p>② 白いへいの家の話し声を聞いたあと、滑はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そんな話、聞かなければよかった。 ・返そうかどうか迷った。 ・今すぐに返しに行かなくてもいいだろう。 <p>③ 冷たくなったカナリヤをだきかかえている滑は、心の中でどんなことを考えていたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白いへいの家の人のお話を聞いたとき、すぐに返せばよかった。 ・天候が変わったとき、すぐにソフトボールをやめて、家に帰ればよかった。 ・ビーや、飼い主にすまないことをしてしまった。 ・ビーがかわいそう。 <p>④ 滑にどのような考えがあればカナリヤを死なせなかったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カナリヤのことを考えて、本当の飼い主に返せばよかった。 ・カナリヤをもっと大切にし、本当にかわいがる心があればよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までの経験を発表する中で、ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 ・ カナリヤを自分で飼おうとしている滑の気持ちに共感できるようにする。 ・ 飼い主がわかったのに、カナリヤを返さない滑の自分本位な考えに気付くことができるようにする。 ・ 自分の不注意や無責任さから、カナリヤの生命を絶ってしまったときの滑の自己反省に共感できるようにする。 ・ 生き物に対して、どのような心で接することが大切であるか深く考えられるようにする。 ・ 自分の生活体験を振り返ることによって自己の課題やよさを見つけられるようにする。 ・ 望ましい事例を紹介することにより、動植物に対する愛護の心育が高められるようにする。
<p>(3) 自分の生活体験から発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今まで、どんな気持ちで生き物の世話をしてきましたか。 ・ 世話をするのがめんどうだと思った。 ・ かわいいから進んで世話をした。 ・ 命を守るためにこんながんばった。 <p>(4) 本時の学習のまとめとして話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 動物を大切に育てている人の話をしますから、よく聞いてください。 	